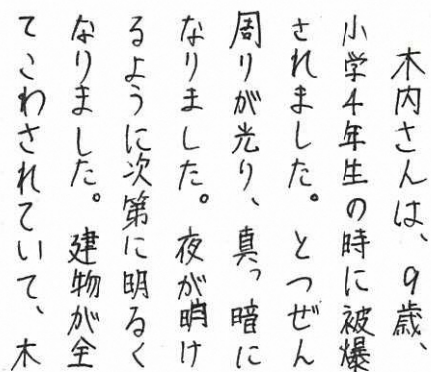


子ども平和新聞

9歳の頃の記憶



内さんだけがその中にいました。「友達もいない、何が起きたか理解できなかった」と話し、いました。それでも「家に帰らなまじ」と思、たそうです。右の額と足くびにこぶがでただけで助かった

本内さんには自分なせ
生き残り、てゐるのかも
分からなかったそうで
す。今、まいてみると
「今の自分でも分から
ない」と語っています

ついで、「あの日以来
生き残つて受けた身体
の傷も、心の傷も深く、
いつまでも苦しみを味
わつてきたことは同じ
だと思つています。そ
して、今の戦争の歴史
を後世に伝えることが
重要で、本当の平和を
守りぬき、もう二度と
苦しみをくり返さない
ことが大切だと思いま
す」と伝えていきます。

(宮下) (平井)



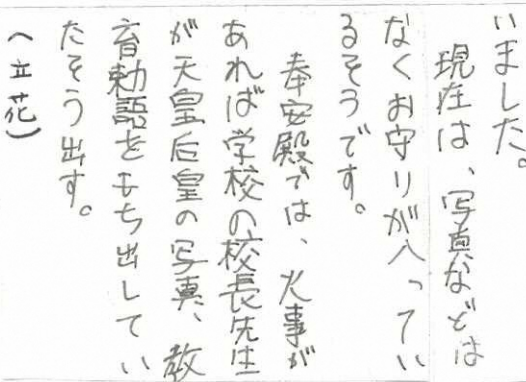
天皇を大事に
した奉安殿
奉安殿の様子

殉職救護員の碑は、
てき味方問わずたくさ
んの人の命を救った殉
職救護員をたたえてつ
くられました。救護員
とは、戦傷病者の手当
てをしたかんご師のこ
とです。埼玉県では、
32人が行事中に亡くな



殉職救護之碑

起志乃天神社では、昔天皇を大事にしなさいと伝えられ、小学校に行く前に通った、きちんとかがとをそろえて30度でおいぎをしようといひ頃から教えられていたそうです。高砂小から1946年に移築し、起志乃天皇神社の本殿となりました。



コラム

ぼくは戦争がよくないと思います。理直は戦争がおそろい家はおチャブチャになリ死体だらけになつてたくさんの方がたおれてゐます。

木内さんの話によると、広島にくうしゅうが、おそえ学校にばくだんがおちてきたり、くうしゅうかいほうがでて、それが、かいじょされたその日本内さんは、あひるやさんがあるぶんこうに行つて、そこでめんじんとそのとぎにかつと光つて木内さんはさげふもた。母があげるとまわりの友達はいなくなつていた。自分がかそうなつたらしてもかたしいです。木内さんはずわつていたら木内さんの名前をきいてる男の人とねなん所ににげた。そこで木内さんのお母さんにあいっしょにまた男の人はお兄さんだということとがわかつて、そのあと坂城に行ってそこですべししました。戦争をするとかくさんの人がなくなるので戦争をするといふと思ひます。(吉川)

苦ハ